

大矢 和憲の社会科（第3学年）研究計画

1 本研究の位置付け

学習指導要領の改訂を受け、小学校社会科では、問題解決的な学習を通して、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図ることが求められている。

本来、社会的事象は、より多くの様々な立場の人々にとって、よりよい状況を生み出すための工夫や努力、願いによって成り立っている。このことは、どの社会的事象においても共通した概念であり、変化する社会においても、普遍的なものである。つまり、社会的事象を学習対象とする社会科の学習では、社会的事象に携わる人々の工夫や努力、願いといったものが、様々な立場の人々にとってよりよい状況を生み出しているという概念をとらえることが、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことにつながるのである。

一般的に中学年社会科では、身近な地域の事例を取り上げ、それに携わる人々の工夫や努力、願いを追究させる学習が行われている。しかし、取り上げた事例における工夫や努力、願いが分かっても、事例が変わると同じような見方や考え方ができない子どもの姿がある。このような子どもは、類似する事例に共通する中心概念（概念的知識）をとらえることができていないのである。

例えば、販売の仕事の学習で、あるスーパーマーケットで働く人々の工夫が分かっても、それらはそのスーパーマーケットで行われている工夫であり、コンビニや商店で働く人々の工夫とは異なるものである。これらは、事例によって異なる具体的知識である。しかし、「販売者は、消費者のことを考えて様々な工夫を行っていて、工夫することで消費者にとっても販売者にとってもよい状況を生み出している」という中心概念は、他の販売に関する仕事の事例でも共通している。つまり、事例の学習を通して、類似する事例に共通する中心概念をとらえさせることが大切なのである。

それではなぜ、子どもは中心概念をとらえることができないのか。その原因は、取り上げた事例に携わる人々の工夫や努力、願いを調べ、それらの具体を理解させることに学習が止まっていて、人々の工夫や努力、願いが、様々な立場の人々にとってよりよい状況を生み出していることをとらえさせていないことにある。そこで私は、類似する事例に共通する中心概念をとらえさせるために、次のように授業を改善する。

まず、単元の終末で中心概念を獲得させる場面を設定する。その場面で、他の類似する事例にも見られる工夫や努力、願いが表れている事実を取り上げ、その目的や原因、効果などを追究する学習問題を設定させる。そして、取り上げた事実がある場合とない場合に起こりうる状況をウェブマップを用いて考えさせる。さらに、誰にとってどのようなことがあるかを考えさせることで、子どもは、様々な立場の人々にとってよりよい状況を生み出すためではないかと考え、目的や原因、効果などを確かめる。このように学習問題を解決した子どもは、社会的事象における因果関係や相互関係に気付き、類似する事例に共通する**社会的事象の中心概念をとらえる子ども**になる。

2 主張する働き掛け

単元の終末の中心概念を獲得させる場面において、子どもの既存の認識（生活経験、既習の具体的知識を含む）との間にずれを生む教材を提示する。教材は、子どもの既存の認識から考えると、ある立場から見たらデメリットを感じる事実を含んだ教材である。これにより、子どもは、思っていたことが当てはまらなかったり、これまでの認識ではうまく言えなかったりして、どうしてなのかなや何のためなのかななどと、取り上げた事実の目的や原因、効果にかかわる疑問をもつ。

そこで、取り上げた事実に対して、子どもが疑問に思ったことを問う。子どもは、「～なのになんで～なのだろうか」、「何のためにしているのだろうか」などと、取り上げた事実についてもった疑問を話し始める。このとき、子どもが何を基に疑問を感じたのかや、どのようなところに疑問を感じたのか、どうなっていると思っていたのかなど、子どもの既存の認識を引き出し、疑問を焦点化していく。そして、どのような学習問題がつけられそうかを問い、取り上げた事実の目的や原因、効果を明らかにしようとする学習問題を設定させる。

働き掛け1

取り上げた事実がある場合とない場合の資料を提示し、ある場合とない場合とでどのようなことが起こりそうかと問い、小グループでウェブマップをつくらせる。

子どもは、取り上げた事実について、デメリットを感じて学習問題を設定している。そのような子どもに、まず、取り上げた事実がある場合とない場合の資料を提示し、ある場合とない場合とで、どのようなことが起こりそうかと問う。そして小グループでウェブマップをつくらせる。子どもは既存の認識や資料を基に、ウェブマップ上で、起こりうる状況を因果関係でつなげて多角的に考え、マップに書き込んでいく。

働き掛け2

ウェブマップを見させ、誰にとってどのようなことがありそうかを問う。

取り上げた事実がある場合とない場合とで起こりうる状況について、多角的に考えている子どもに、「ウェブマップを見ると、誰にとってどのようなことがありそうか」と問う。「誰にとって」と問うことで、子どもは立場を視点に、小グループでウェブマップに書いてあることを見直す。また、ウェブマップの「事実がある場合」の欄には、「良い状況」が、「ない場合」には「悪い状況」が書かれている。子どもはそれらを見て、「Aの立場にとって良い（悪い）ことがある」「Bの立場にとって良い（悪い）ことがある」と考える。そこで、全体で「誰にとってどのようなことがありそうか」についての考えを発表させ、事実がある場合とない場合とに分類して子どもの考えを板書する。これにより、子どもは、発言や板書から「取り上げた事実があると、AとBの立場にとって良いことがある」「取り上げた事実があると多くの人にとってよいことがある」という、複数の立場の相互関係に気付く。

働き掛け3

学習問題についてどのようなことが言えそうかを問い、考えを交流させる。

取り上げた事実とその目的や原因、効果との間にある因果関係や相互関係に気付いた子どもに、学習問題についてどのようなことが言えそうかを問い、全体で考えを交流させた後、自分の考えをワークシートに記述させる。このとき子どもは、**関係付けるすべを使って、「事実がある場合とない場合のAの立場」と「事実がない場合とない場合のBの立場」とをつなぎ、「Aの立場とBの立場のどちらにとってもよいことがある。だから取り上げた事実があるんだ」と、取り上げた事実の目的や原因、効果について仮説を立てる。**

このような子どもに、「考えは正しいのか」と問うと、子どもは、「きっとこのように考えているはずだ」「きっとこうなっているはずだ」と、自分たちの立てた仮説が本当に正しいのかどうかを確かめたいくなる。このような子どもに、仮説を確かめるためには「何が分かればよいか」「どうすればよいか」と問うことで、子どもは必要とする情報と、情報を得るための方法を考える。

働き掛け4

調査活動を設定したり、ゲストティーチャーに出会わせたりし、必要な情報を収集させる。

必要な情報を得るための方法を考えた子どもに調査活動を設定したり、ゲストティーチャーに出会わせたりする。子どもは、調査活動やゲストティーチャーの話から、仮説を確かめるために必要な情報を収集し、自分たちが立てた仮説の正否を確かめる。その後、学習のまとめとして、分かったことや考えたこと、思ったことを問い、ワークシートに記述させる。子どもは、取り上げた事実と、その目的や原因、効果とを関係付け、再構成し、類似する社会的事象に共通する中心概念をとらえる子どもの姿になる。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 活用の場面で、構想した働き掛けにより、想定した「考えるすべ」を使って、既存の類似した知識や経験をつなぐことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、学びをつなぐ力を高めた姿になったか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3を受けて、「関係付けるすべ」を使って、取り上げた事実をした場合に起こりうる結果と、しない場合に起こりうる結果や、影響を受ける複数の立場をつなぎ、取り上げた事実の目的や原因、効果などを考えることができたかどうかを、発言やワークシートの記述から検証する。
- ② 働き掛け4の後で、類似した社会的事象に共通する中心概念をとらえることができたかを、ワークシートの記述から検証する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業(7月) 「調べよう！ ころさき茶豆をつくる仕事」(14時間)
- (2) 中間検討会(9月) 「見直そう！ わたしたちの買い物」(14時間)
- (3) 初等教育研究会(2月) 「伝えよう！ まちの人たちが受け継ぐ行事」(14時間)